

## たかが葛根湯、されど葛根湯

宮城利府掖済会病院

副院長 片寄 大

### 葛根湯の効く人、効かない人

漢方を知らない人でも『風邪に葛根湯』を知らない人はいないだろう。『たかが葛根湯』であるが、この方劑(複数の生薬をあらかじめ組み合わせたもの)を適切に使用することは意外と難しい。『葛根湯は効かない』という声をよく耳にするが、はっきり言ってしまうとそれは『使い方が下手だから』なのである。葛根湯はPL顆粒(総合感冒薬の一種)のように全ての風邪に効くということはない。葛根湯が効く病態に使用されてはじめて効く薬である。

では葛根湯が効く病態とはどんな病態なのだろうか。葛根湯は元気な若者や、中年の方の風邪の初期によく効く。このような病態では体に十分な抵抗力があり、外からやってくる病原体に体がしっかり防御反応を示している。漢方では、このような病態を陽証とよんでいる。葛根湯はこの陽証に対する薬なのである。一方、冷え性の女性や高齢者の風邪には葛根湯はまず効かない。このような病態は体の抵抗力が不十分であり、外からやってくる病原体に対し体がしっかり防御反応を示すことができない。このような病態は漢方では陰証と呼んでおり、麻黄附子細辛湯、真武湯といった体の奥をあたため防御反応を強める作用を有する漢方薬が必要となる。この陰証に対して葛根湯を投与するという『下手な使い方』をしては葛根湯はその効果を発揮することはできない。

また、葛根湯が効力を発揮するには投与方法や投与量も重要である。体が発汗するまで、葛根湯をお湯に溶かし1包ずつ10分毎に追加服用してもらい、あるいは初回2包服用してもらいなど、十分な投与量を心がける工夫が必要である。

### 私の思い出

葛根湯の思い出をひとつ。私が30代中ごろで大学の医局員だった頃の話である。当直にあたっていた夕方、発熱、頭痛、悪寒などの風邪症状がきた。発汗はない。脈を診ると浮いていて緊張感のある脈である。葛根湯2包をお湯に溶かし服用して布団にくるまったら、かーっと体が熱くなりさーっと汗が出て翌朝風邪症状は消失していた。『葛根湯はすごい薬だな』とほんとびっくりした。若かりし頃の私の風邪は典型的な陽証であった訳である。それから約10年後、私が現在の職場に赴任後の40代中ごろのことである。10年前と同じように、発熱、頭痛、悪寒などの風邪症状。脈はやはり浮いてて緊張感がある。10年前と同じように葛根湯2包服用。体がかーっと熱くなり発汗。しかし咽頭痛などの症状が残り風邪は全快しなかった。10年の間に私の体は老化し葛根湯が効かない体、すなわち陰証になってしまったのだなとつくづく思った。

インフルエンザにも効く

葛根湯は通常の風邪のみならずインフルエンザにも有効である。インフルエンザの漢方というと麻黄湯が有名であるが、麻黄湯が効く病態は、インフルエンザのごく初期である。悪寒がとれつつあり高熱となる段階になると麻黄湯は効かない。中国の漢方ではこのようなインフルエンザの進行した段階に有効な銀翹散という処方があるが（もともと病因が異なる病態の薬であるという議論があるがここでは触れない）、残念ながら保険適応外の処方である。葛根湯に配合されている葛根には熱さましの効果があり、桔梗石膏と谷方(同時服用)することで銀翹散類似の薬効も期待でき、高熱となったインフルエンザにも使用可能である。私は、インフルエンザ初期には麻黄湯はあまり処方しない。葛根湯の方がインフルエンザのより広範なステージに有効性が期待できると考えるからである。

### 多彩な効能

葛根湯は風邪やインフルエンザ以外の様々な病態にも使用できる。葛根湯は下痢に有効である。下痢に対して処方する場合も、病気に対して体がしっかり防御反応を示しているいわゆる陽証であることが条件となる。下痢に葛根湯を処方できる人は玄人だなあと私は思っている。葛根湯はまた肩こりにも有効である。葛根湯の中の葛根の筋弛緩作用、麻黄や桂枝による発散作用、桂枝による血行促進作用が肩の疼痛緩和に有効なのであろう。さらには葛根湯は鼻閉、副鼻腔炎にも有効である。葛根湯に通鼻作用のある川芎、辛夷を追加した葛根湯加川芎辛夷は鼻閉の特効薬として有名である。そして葛根湯は湿疹や蕁麻疹に

有効である。特に顔面、上半身に発生した皮疹に有効性が高い。感冒に伴う皮疹などはもっともよい適応であり、私はこの目的で葛根湯を使用することが多い。最後になるが、驚くなかれ。葛根湯は乳汁分泌不全症にまで有効性が知られているのである。葛根湯の多彩な効能には驚くばかりである。

意外なことであるが麻黄湯、小青竜湯、麻黄附子細辛湯などの漢方薬については沢山のRCT(ランダム化比較試験：対象を無作為に選び、薬・検査・看護などを行うグループとなにも行わないグループとに分け評価を行う研究方法)論文があり診療ガイドラインにも記載があるが、葛根湯に関するRCTは少なく診療ガイドラインへの記載は現在のところみあたらない。病名漢方的な投与方では、葛根湯の効能が十分に得られないことがその理由かもしれない。葛根湯の多彩な効能を使いこなすには、病状を陰陽に分類する漢方的診療の基本が要求されるのであろう。やはり使い方が下手では葛根湯は効かない。『されど葛根湯』なのである。